

追悼文

## 蟹沢先生を偲んで

2014年3月18日に蟹沢成好先生が逝去されました。

ここに謹んで蟹沢先生のご冥福をお祈り申し上げます。

蟹沢先生は東京都老人総合研究所の設立時の所長であった太田邦夫先生の下で、基礎病理部部長の田中康一先生と共に研究所の運営と活動に多大な功績のあった方です。

東京都健康長寿医療センターの丸山直記先生から、日本基礎老化学会誌（基礎老化研究）に載せるので、蟹沢成好先生の追悼文を、と要請されました。蟹沢先生は老人研における私の前任者であり、10歳年長の大先輩であり、お付き合いはありましたが、一緒に仕事をしたことはありません。しかし、後任者として老人研に赴任してみると、研究室には蟹沢先生が育てた優秀なスタッフも残っていて、時間をあまり無駄にすることなく、仕事を始めることができ、有難かったという思いがあります。追悼文を書くには、もっと適任者がいるのでは思いましたが、みんなに好かれた高名な蟹沢先生について書くのであれば、光栄なことと考え、お引き受けしました。

蟹沢先生は千葉大学医学部を1957年に卒業され、インターンを経て、1958年には千葉大学の滝沢延次郎教授の病理学教室で大学院生となりました。蟹沢先生といえば、肺発癌実験で有名ですが、この肺発癌実験を始めたのが、この滝沢病理学教室であったのです。発癌実験は発癌性の弱いキノンをマウスに長期間吸入させたあと、肺組織全体を肺葉別に連続切片を作り観察するという大変なものでした。1961年に大学院を卒業されたあと、千葉大学腐敗研究所に就職し、食品添加物や薬物の毒性、発癌性の研究、肝癌の発生機序とその抑制物質、抑制機序の研究が続けられました。この腐敗研に在任中の1966～1968年の間にダートマス医科大学に留学し、発癌研究に従事し、その成果はCancer Res等に報告されています。その後1972年に友人であった田中康一先生の誘いを受けて、設立間もない東京都老人総合研究所に移りました。蟹沢先生にとっては老化の研究は全く新しい分野でしたが、当時の所長であった太田邦夫先生に就任後お会いした時、「君は肺癌をやるんだろう？」と言われて、肺癌研究を続けることになったそうです。今では、癌化も老化も重なる部分の多い研究分野であることは良く知られています。しかし、太田先生は既にそういう考えをお持ちで、躊躇することなく老人研で癌研究を進めていったのです。

老人研で発癌研究をつづけた蟹沢先生は、当時、抗菌剤として開発されたニトロフラン化合物NFNを微量でも経口投与すると多臓器に発癌することを発見し、報告しています。肺発癌については、クララ細胞とⅡ型肺胞細胞の役割を明らかにし、病理学会（1977年）のA演説として発表しました。老化研究については、老人研シンポジウム「老化と癌化」（1977年）のシンポジストとして、人体腫瘍と実験発癌の両面の知見を発表しました。

そして、1981年の9月に横浜市立大学医学部病理学講座の教授に就任しました。大学では若い研究者がたくさんあつまり、肺発癌研究者としての蟹沢先生の面目躍如たるものがありました。集まった若い人達の研究活性は高く、次々と良い結果が発表され、彼らは新しい研究分野のリーダーとして発展して行きました。

蟹沢先生は、見た目通りに温厚そのもので、先輩、同僚、大学院生、技官の皆さんから好かれていました。1996年に、大学を去ってからは、先生の専門領域を仕事とする食品薬品安全センター秦野研究所の顧問として、また、人体病理の診断医としても活躍されていました。

昨年の半ばごろに耳下腺癌が見つかり、重粒子線で治療し、良い経過をたどっていたのですが、今年の2月頃から体調を崩され、3月18日にご逝去されました。ここに追悼文をしたため、蟹沢成好先生のご冥福を重ねてお祈り申し上げます。

東京医科歯科大学名誉教授、健康ライフサイエンス代表、中野総合病院顧問

廣川 勝昱